

氏名(本籍)	ほ　　とうげ　　しゅう　　こ 朴　　峠　　周　　子(北海道)
学位の種類	博　　士(学　　術)
学位記番号	博　　甲　　第　　6259　　号
学位授与年月日	平成24年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	小学校高学年児童における首尾一貫感覚の形成と機能に関する研究

主査	筑波大学准教授	保健学博士	武田	文
副査	筑波大学教授	博士(心理学)	庄司	一子
副査	筑波大学講師	博士(学術)	望月	聡
副査	岡山県立大学准教授	博士(保健学)	坂野	純子

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

現代における健康概念として、健康の維持・増進・回復に着目した健康生成論が提唱され、健康要因として「首尾一貫感覚 (Sense of Coherence 以下、SOC)」が見出された。SOCは、生活する中で困難に直面しても、状況を把握し、自らの力そして周囲の環境や他者の助けを得ながら対処する過程に意義や価値をもたらす感覚であり、ストレス対処力を表す。SOCは生涯を通じて発達し、成人期以前は変動が大きく不安定であるが、成人期までに良好な状態に形成することがその後の安定したSOCにつながることで、形成要因としてソーシャルサポートが重要であること、また、適切なストレス対処行動を促し、ストレス反応を抑える機能をもつことが指摘されている。このような理論を実証する上では、成人期以前のSOCの形成やストレス対処への機能を解明することが重要である。しかし、中高生における知見が徐々に蓄積されているものの、小学校高学年児童における実証研究は極めて少ない。他方で、小学校高学年において深刻化している精神健康問題を解決する上では、SOC概念を用いたアプローチが必要と考えられる。そこで本研究では、小学校高学年児童を対象とし、SOCの形成と機能に関する研究課題を設定した。

SOCの形成については、SOCのレベルと変動(研究1-1・1-2)、ソーシャルサポート総体量との因果関係(研究2)、ソーシャルサポート源・内容との因果関係(研究3)を明らかにする。また、SOCの機能については、ストレス対処行動との関連(研究4)、ストレス反応との関連(研究5)、SOCレベル別にみたストレス対処行動・ストレス反応の関連構造(研究6)を明らかにする。

(対象と方法)

神奈川県内近郊の公立A小学校に通う4～6年生全員(4年生:138名、5年生:124名、6年生:141名、合計403名)を対象とし、2009年度の1年間に、無記名自記式の調査票を用いた集合調査を合計3回(1学期:5月、2学期:10月、3学期:2月)実施した。各児童にID番号を付与し、研究者のみが把握する手続きをとることで、データを追跡した。1学期・3学期は、属性・SOC・ソーシャルサポート、2学期は、これらに加えてストレス対処行動・ストレス反応に関する項目を質問し、研究1～3については縦断的に、研究4～6については横断的に検討した。

(結果)

研究1-1では、小学校4～6年生集団のSOCレベルは中高生のいずれよりも高い可能性が示され、1年間の集団全体でのSOCには学年・性別・学期による違いが認められなかった。一方、研究1-2では、1学期から3学期におけるSOCレベルの変動には個人差があること、各学期のSOCレベルを2群化し1・2・3学期のレベルを掛け合わせた8つの変動パターンを観察すると、6割の児童はSOCレベルが1・2・3学期を通して安定している一方で（高値維持群・低値維持群ともに約3割）、4割の児童は2学期か3学期、あるいは両学期でSOCレベルが変動することが明らかになった。研究2では、ソーシャルサポート総体量とSOCが相互の因果関係を有することが実証され、1年間のSOCを高める上では、1学期・2学期時点での豊かなソーシャルサポートが重要であることが示された。研究3では、1学期の先生からの情緒的サポート、1学期・2学期の友だちからの情緒的サポート、また、2学期の先生からの手段的サポートと父親からの情緒的サポートがSOCを向上させることが明らかになった。

研究4では、SOCレベルによってストレス対処行動に違いがあること、研究5では、SOCが高い児童ほどストレス反応が少ないことが明らかになり、研究6では、これらの関連構造が異なることが示された。すなわち、SOCレベルが高い児童がストレッサーを追究すること、SOCレベルが低い児童がストレッサーを意識しないことは、ストレス反応の抑制に関連していた。一方、SOCレベルが高い児童が告げ口をしたりストレッサーから逃避すること、SOCレベルが低い児童がひとりきりになること、さらに、SOCレベルの違いにかかわらず、女子に多く見受けられるひとり泣くことは、ストレス反応の促進に関連していた。

(考察)

小学校高学年児童の集団全体でのSOCは、属性による影響や1年間での変動がなく、中高生よりも高いことが示唆された。一方で、4割の児童では、2学期・3学期のどこかでSOCレベルが変動し、これらには、2学期における学校での経験や、その質を左右する1学期・2学期時点のソーシャルサポートが影響を及ぼすことが示唆された。まず、クラス替えや学級担任の交代に伴い新たな人間関係を構築する1時期に、友だちと先生が日頃の様子を気かけ相談に乗ってくれることが、学校行事への主体的な取り組みやその成果につながり、その後のSOCを高めていることが推察された。また、学校行事が多い2学期に、先生からの手助け、友だちからの励ましや父親からの日頃の理解を得られることが、失敗経験をした際の対処に直結したり、成功・失敗経験に対する気持ちの整理や前向きな意味づけを促し、SOCを高めていることが考えられた。他方で、このような友だち・先生・父親からのサポートが充分でないことが、SOCの低下につながる可能性が示唆された。

続いて、小学校高学年児童のSOCのストレス対処への具体的な作用が明らかになったことから、ストレス反応の軽減に向けたアプローチが示唆された。まず、他者に不快な感情を告げ口する児童や、解決が必要な問題から離れ別の行為に熱中する児童は、ストレッサーを抱え、ストレス反応が促進される可能性が高い。このような児童はSOCが高いと考えられ、問題解決に向けた行動をとることでストレス反応を軽減できるため、周囲の者が児童の高ぶった感情をなだめ、ストレッサーの解消に向けた具体的な行動を提示することが望ましいと言えよう。また、解決が必要な物事について原因を追究する児童もSOCが高く、ストレッサーを抱えていてもストレス反応を抑制できる可能性が高いと推察される。したがって、適切な対処を講じストレッサーを解消できた際には、周囲の者がそのプロセスや成果を尊重することで、より良い精神健康状態が導かれると言えよう。

他方で、ひとりきりになっている児童は、ストレッサーを抱え、ストレス反応が多い可能性が推察される。このような児童はSOCが低いと考えられ、情動の受容や支援の要求が巧みでないため、周囲の者が、児童の感情表出と受容を支えられるよう傍で見守ることが重要であると考えられる。また、解決が必要な物事からあえて意識を逸らしている児童も、SOCが低いと考えられる。しかし、ストレス反応を抑制する行動であ

るため、周囲の者は問題解決を促すのではなく、むしろ、児童の気持ちを尋ねたり、あまりひとりきりにならないように留意することが望ましいと言える。

ところで、女子がひとりで泣いている場合は、ストレスを抱え、ストレス反応が多い可能性も推察されるが、この行動自体が女子にありがちな傾向であり、SOCレベルの判断が難しい。したがって、まずは、周囲の者が児童の不安定な情動を一緒に受け止めるとともに、SOCの様相を推測し、SOCの状態に応じた支援を講じることが望ましいと考えられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

平成24年1月20日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。

これまで国内外で殆ど先行研究のない小学校高学年児童における首尾一貫感覚の機能と形成について、横断調査・縦断調査によって実証検討した意義ある研究である。適切な研究デザインにより多くの新知見を得て理論検証したのみならず、得られた知見をもとに小学校高学年児童の精神健康問題解決への具体的施策を提示した点で、ヒューマンケア実践への貢献が評価される。今後の検討課題および微細な修正について指摘がなされたが、その後これらの修正内容を確認し、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。